

岡博美)では、静岡県浜松市を事例に、ブラジル人のホスト社会における日常の生活活動空間・時間を明らかにすることで、ホスト社会におけるブラジル人の生活の特質や課題を検討することが試みられている。個人レベルの生活活動日誌データを用いた時間地理学的アプローチにより、個人と同朋ネットワークやホスト社会との接点を解明する分析手法が独創的で興味深い。分析の結果、家族以外の同朋ネットワークへの帰属時間の限定性、消費行動に限定されたホスト社会への同化、といった特徴が明らかにされている。エスニック・アイデンティティが集団内で再生産されるのではなく、家族や知人内で閉鎖的に進められるということから、著者はブラジル人コミュニティが「解体コミュニティ」としての特徴を示すとしているが、それを日本社会全体の抱える問題と重ね合わせて問題提起しているところも含蓄がある。

最後のⅧ章「増加する在留外国人と日本社会－日本社会の多民族化に向けての課題－」(山下清海)では、これまで議論されてきた各地のエスニック・コンフリクトの事例を受け、日本の置かれた現状が編者自身により総括されている。在留外国人の増加にともなうエスニックタウンの形成、およびエスニック・コンフリクトの問題などが扱われているが、そこから伝わってくるのは多民族化しつつある日本社会の課題である。気が付けば「移民」と共生することが日常となっており、移民がもたらす資源と共存可能な場合もあれば、エスニシティの違いが摩擦を引き起こす場合もあることを、常日頃から自覚しておかねばならない状況に日本社会が置かれていることを認識させられる内容である。

読後感であるが、本書は高度な内容の専門書であるため、最終ページに至るまで集中力を欠くことができなかった。しかし読み終えての知的充足感は際立っていた。エスニシティに根差した摩擦

がこれほど多様な展開を示しているにもかかわらず、またエスニシティの切り口は多々あるにもかかわらず、著者らがそれを分析し考察する態度には確かな一貫性があった。

その一貫性は、おそらく本書を貫く徹底した実証主義に生起するものであろう。本書に関わった10名の研究者は、おそらくは数十回以上のフィールドワークを実施し、データを収集している。そうして得られたデータは各者各様であるが、データ収集の際の目の付け所とデータ分析の際の切り口にははっきりとした一貫性がある。入手方法も種類も千差万別のデータであるにもかかわらず、そこからは一様にエスニシティに関わる内容が抽出され、対象とするコンフリクトの種類により内容が選別され、最終的にエスニック・コンフリクトの議論に昇華されている。著者個々人の分析力や洞察力に感服するが、同時にこれほど雑多なテーマを一貫性のある専門書としてまとめ上げる編者の力量にも頭が下がる。様々な体系的手法が一冊にまとまっている本書は、エスニック地理学に関係する評者にも大いに参考になったが、若い研究者や地理学を志す学生にとってなおさら役立つことであろう。

今後の日本では、本書で扱われたようなエスニック・コンフリクトがますます増加するであろう。本書に代表されるエスニック地理学研究者による業績の蓄積は、そのような時に必ずや日本社会に還元されるはずである。

(石井久生)

アンガス・ライト、ウェンディー・ウォルフォード著・山本正三訳：『大地を受け継ぐ 土地なし農民運動と新しいブラジルをめざす苦闘』二宮書店、2016年4月刊、401p., 4,800円(税別)

ブラジルの農村を移動していると、黒いビニールで覆われたテント群を見つけることがある。初めてそれを見る日本人は、たいてい「あれは何だ!？」と驚く。私も最初にそれを見た時、ホームレスの住居だと思った。同乗者に尋ねると、それは「土地なし農民運動」であり、テントの住民は他に住所を持っていることを教えていただいた。黒いテント群をよく見ると、活動であることを示す旗が立っている。

私はブラジルの農場で調査をしていたにもかかわらず、土地なし農民運動の実態をよく知らなかった。しかし、この400ページにわたる翻訳書を読んで、その運動がブラジルの社会や土地利用に深く関わっていることを知った。以下、章ごとに若干の内容を紹介する。章のタイトルだけでは分かりづらい部分もあるので、節のタイトルも記述する。

序章 大地を受け継ぐ

1. 不平等から生じる欲求不満の罫
2. 不平等の罫を避ける方法
3. 歴史の地理：本書の構成
 - ・ブラジル史とMST（土地なし農民運動）史との関係（年表）
 - ・略語集
 - ・ポルトガル用語

ブラジルはBRICSの一員であり、経済発展の著しい大国である。ワールドカップサッカーやオリンピックが開催され、街には新車が溢れている。しかし貧富の差が大きい社会である。大都市では、傾斜地などにファヴェーラ（スラム）が広がる。夜にレストランで食事をしていると、小学生や未就学の子供が、靴磨きや物乞いに来るし、交差点には物売りが立っている。そのような不平等な社会が、土地なし農民運動に結びついた。

土地なし農民運動は、Movimento dos Trabal-

hadores Rurais Sem-Terraの訳であり、一般には略してセンテールと呼ばれる。センは「無い」を、テールは「土地」を意味する。ブラジルには、一つの土地に住み続けると、そこを自分のものにできるという法律がある。その解釈に基づいて、農場の一画に住んで、自分の土地を獲得するというのが、土地なし農民運動の概要である。人が管理している土地には入れないので、道路と耕地の隙間など、あまり利用されていない場所で活動する。

第1章 約束の履行

- 第1節 リオ・グランデ・ド・スール州におけるMST（土地なし農民運動）の起源
- 第2節 20年間の独裁政権
- 第3節 リオ・グランデ・ド・スール州における農地改革の起源
- 第4節 野営地の生活
- 第5節 新しい考え方、新しい言動
- 第6節 教会は執行猶予を仲介する
- 第7節 入植者の勝利とMST（土地なし農民運動）の全国組織の成立
- 第8節 サランディ Sarandí: 農地改革集落（アセントメント）の挑戦

ブラジルで土地なし農民運動が始まったのは、南部（スール）のリオ・グランデ・ド・スール州である。ファゼンダと呼ばれる大農場が知られるブラジルであるが、リオ・グランデ・ド・スール州では、小規模な家族経営の農場も多く、それらは独裁政権（1964年から1985年の軍事政権）の時代に経営が悪化した。

借金で土地を追いつめられた小規模農家の家族が、1979年にファゼンダ・マカリとファゼンダ・ブリリヤンテを占有したのが、土地なし農民運動の始まりである。各地で同様の運動が発生し、

1984年にはパラナ州で全国大会が開催されて、全国組織が誕生した。

野営地のテントでの生活は厳しいが、その運動が法的に認められると、大農場の土地が分割されて、アセントメント (assentamento) とかアセントードと呼ばれる農地改革集落となる。また、先の物乞いの話題に関連するが、持つ者が持たない者に施すことは、カトリック文化の一面でもある。

第2章 土地は第1歩でしかない：ペルナンブコ州と北東部ブラジル

第1節 農地改革と新民主主義

第2節 ブラジル北東部

第3節 抵抗の歴史

第4節 MST (土地なし農民運動) とペルナンブコ州における土地闘争

第5節 土地は第1歩でしかない

第6節 大規模経営地域における小規模農民

第7節 北東部における農地改革：バランス・シート

北東部 (ノルデステ) はブラジルで最も貧しい地域である。干ばつが頻発する内陸の厳しい気候や、植民地時代に組織化された大土地所有制によって、農村の不平等が5世紀も続いた。文化的・社会的に最もブラジルらしい地域であるが、同時に最も農地改革が難しい地域でもある。北東部では、貧しい住民による土地なし農民運動が、各地に普及した。

土地なし農民運動では、時には道路を閉鎖して、廃タイヤを燃やして、拡張機で演説をするというアクティブな面がある。「土地は第1歩でしかない」という節にあるように、活動によって獲得した土地ではあるが、小規模な家族農場が、大規模なファゼンダの中で持続的に経営を続けていくことは難しい。

第3章 アマゾンの魅惑を超えて

第1節 アマゾン

第2節 アマゾンの変貌

第3節 MSTによる農地改革集落とカラジャス鉄山を訪ねる

第4節 MSTはアマゾンのどこに存在するか、そして誰がそれを支えているか？

第5節 バルマレスIIの暮らし

第6節 アマゾン開発の弁証法

北部 (ノルテ) のアマゾンは、熱帯雨林が繁茂する人口希薄地帯である。典型的な大農場は少ないものの、土地なし農民運動は、北部のアマゾンにも広がった。鉄山などの政府主体の大規模な開発地だけでなく、ゴム農園や金鉱山などに、土地なし農民運動が存在する。それを実行しているのは、鉱山の企業で働く労働者だけでなく、農場で働くゴム樹液採集者、ガリンベイロ (砂金採集者) などの貧しい人たちである。

第4章 MST (土地なし農民運動) の評価

第1節 農地改革集落の生活状態は改善されているか？

第2節 農地改革「ライト」

第3節 世界の農地改革：アメリカ合衆国の政策の伝統と影響

第4節 従属の民を避ける

第5節 農地改革と刑事責任免除 (法的不可罰性) と土地と森林の将来

第6節 MSTと革命

第7節 市民権の醸成と「日常の政治」闘争

第8節 ブラジルにおけるMSTと市民社会

第9節 国際的関連におけるMST

第10節 MSTの子供たちとその将来

第11節 補遺：ルーラ政権

・ブラジルの情報

・ 訳者あとがき

筆者のアンガス・ライトは、カリフォルニア州立大学の名誉教授であり、ラテンアメリカ史と「抵抗の地理学」が専門である。ウェンディー・ウォルフォードは、コーネル大学社会学部の教授であり、開発社会学が専門である。彼らは、土地なし農民運動の当事者に対して聞き取り調査を実施した。筆者らは、土地なし農民運動の目標は、「広い知識があり、教育のある、活発な一般大衆の形成」であり、「都市の街路やスラム街での生活につきまとう危険から解放されること」と述べる。

現在のブラジルには、土地なし農民運動から派生した幾つかの運動が展開する。例えば、空いた建物を占拠するのは、センテート（屋根なし労働者運動）である。サンパウロ市の日系人街を歩いていた時に、建設途中で放棄されたビルで人々が演説するのを見て、丸山浩明先生にそう教えていただいた。サンパウロ州のある日本人入植地では、入植の記念になるような古い建物でも、何処かの誰かが住み着いてしまうため、残しておけないと聞いた。

誰の意見を聞くかによって、土地なし農民運動の印象は異なる。私の場合、農場主への聞き取り調査が多かったため、多くの情報を得られなかったが、例えばマット・グロッソ・ド・スール州の場合、運動のアセンタメントは家族あたり20haに達する。そのため、州都の近くにある小規模な日本人入植地で運動が始まった時には、相当の交渉をして運動を止めてもらったと聞いた。一方、遠隔地のパンタナールには、1万haを超える大農場が幾つもあるが、テント生活ができるような環境にないので、土地なし農民運動を見たことがなかった。

訳者の山本先生は、静岡県農家の出身であり、日本の農地改革を身を以て知る世代である。

「訳者あとがき」では、ブラジルの土地なし農民運動と日本の農地改革を比較した考察が興味深い。

(仁平尊明)

文 献

松本栄次著・撮影 (2012) : 『写真は語る : 南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店。

丸山浩明編 (2013) : 『世界地誌シリーズ6 : ブラジル』朝倉書店。

菊地俊夫・松村公明編著 : 『文化ツーリズム学（よくわかる観光学3）』朝倉書店、2016年3月刊、184頁、2,800円（税別）

本書は朝倉書店の「よくわかる観光学」シリーズの一つであり、『観光経営学』『自然ツーリズム学』に続く第3巻として刊行された。17名の研究者が異なる専門分野、様々なアプローチを通して「文化ツーリズム」を解説する。

本書が対象としている「文化ツーリズム」とは、「人口の構築物や無形の芸能、異国民などの生活様式などを鑑賞・訪問することによって発生するさまざまな事業」を指し、有形・無形の観光資源が「文化ツーリズム」の対象となる。文化ツーリズムの対象を「人間の手が入って創りあげられた」資源と捉え、人が管理に関わる自然資源を含めて文化ツーリズムの対象であり、幅広い、多様性のある概念である。それゆえ、本書では人文社会科学のみならず、土木工学・建築学・都市工学など計画系分野のフレームワークとアプローチの解説にも重きを置いており、既刊の観光学入門書で取り扱われなかった「まちづくり」の視点が目次構成に反映されている。

本書の構成は、「周辺領域からの視点編」「コンテツ編」「計画学からのアプローチ編」の3部